

バレーボールが持っている魅力の可視化

山田 快*, 榎本 恭介**, 荒井 弘和*

Visualization Research on the Attractiveness of Volleyball
Kai YAMADA*, Kyosuke ENOMOTO**, Hirokazu ARAI*

Abstract

Volleyball currently faces many difficulties in Japan. In particular, the acquisition of people involved in volleyball is one of the most important and urgent tasks. Attractiveness has been considered as a contributing factor to increase involvement in sports. For popularization and advancement of volleyball in Japan, we attempted to clarify the attractiveness of volleyball. Therefore, the aim of this study was to examine and visualize the attractions of volleyball. Through an open-ended questionnaire survey, data regarding the attractions of volleyball were collected from 77 university students (45 males, 32 females; average age 20.68 ± 0.68 years) who took a sports science class using volleyball. A qualitative analysis was conducted to extract the attractiveness features of volleyball, which were categorized based on the closeness of response meanings using the KJ method. Two hundred and sixty-eight valid responses that were obtained from the survey were mainly classified into six categories: "team sport," "specific playing structure," "playing," "spectating," "interaction with other persons" and "outcome for affection." Results indicated that the participants involved in volleyball understood the six attractions, and which were connected to each other. Additionally, this suggested that transmitting the attractions will be a motivation for starting and continuing involvement in volleyball. Therefore, we should aim to discover further attractive inherent characteristics of volleyball by refining the six attractions. This will not only help solve the various tasks, but also increase involvement in volleyball and advance the value of the sport.

Key Words: volleyball, attractiveness, team sport, interaction with other persons, qualitative analysis
キーワード: バレーボール, 魅力, チームスポーツ, 他者との相互作用, 質的検討

I. 緒 言

バレーボールは、わが国でポピュラーなスポーツの1つに数えられよう。とりわけ、日本のバレーボールはチームスポーツとして、これまでにオリンピック競技大会で9個のメダルを獲得し、類まれなる活躍を見せ⁸⁾、世界のバレーボール界をリードする²⁶⁾とともに、わが国のスポーツ界を牽引してきた。

そのような輝かしい歴史がある一方で、わが国のバレーボールは今日、多くの課題を抱えるスポーツとなっている。頭を悩ませる課題の1つに、国際競技力が挙げられる。2017年7月現在、全日本女子チームがFederation Internationale de Volleyball (FIVB: 国際バレーボール連盟) 世界ランキング6位、男子チームは12位に位置している⁴⁾。男子は北京大会以降、連続でオリンピック競技大会の出場を逃し、近年は男女ともに、これまで国際競技力が低かったアジア諸国との対戦で苦戦を強いられるなど、かつての国際競技力が維持されているとは評価し難い。

指導上の体罰も看過できない課題である。2012年に大阪府で発生した指導者による選手への体罰が、社会を揺る

がす問題へと発展していったことは周知の通りである。この陰で、事件が発生した学校では、2年前に男子バレーボール部でも体罰が行われ、当該指導者が懲戒処分を受けている¹⁶⁾。勝利至上主義などが背景となり、バレーボールは数少ない実態調査¹¹⁾⁸⁾の中で、他の種目と比較して、体罰を受けたことがあると回答した者が圧倒的に多かったと報告されている。そればかりか、過日(2017年11月)も栃木県で事件が発生し³⁾、未だ解決の目処がつかっていない。

そして、国際競技力や指導上の体罰とも結びつく、参画(『する』『みる』『ささえる』¹⁴⁾)者に関する課題は急を要する、とりわけ重要な課題である。大勝²¹⁾によれば、最近4年間(2012—2016年)において、運動・スポーツを1年間行わなかった者が増加していること、国内の運動・スポーツ実施率や少子高齢化などに鑑みると、今後数あるスポーツの中でバレーボールを選び、関わろうとする者を増大させることは容易でない。また、バレーボールは10代で広く実施されているが、20代以降は実施率が漸減し、今後行いたいスポーツとして、あまり評価されていない²⁴⁾。さらに、中学・高校の選手数が激減し、チームの存続が危ぶまれる学校もあるように、競技人口は顕著に減少していることから、バレーボールの今後の在り方を模索していくことが求められている⁸⁾。

*: 法政大学 Hosei University

** : 法政大学大学院 Hosei University Graduate School

(受付日: 2018年4月7日, 受理日: 2018年9月14日)

わが国のバレーボールが以上のような課題を抱える中、今日スポーツの推進は国の重要な施策に位置づけられ¹⁵⁾、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、その動向に国民の注目が集まっている。具体的な取り組みとして、文部科学省¹⁴⁾は「する」「みる」「ささえる」といった多様な形で、スポーツに参画する者を増やし、スポーツを国民の文化に根づかせることを柱としている。すなわち、これからのスポーツの在り方や普及・発展を考える上で、多様な観点から計画や実践がなされるべきであり、わが国のバレーボールの再生、再隆盛に当たっては、先ず以て、バレーボールの存在そのものを支えている参画者に目を向け、その人口を拡大する手立てを検討することが求められる。

これまでに、青柳他²⁾や笠野⁷⁾をはじめ、スポーツへの参加や観戦（関与）を促す要因を究明しようとした研究は数多く行われている。しかしながら、特定のスポーツを取り上げた研究は少なく¹⁰⁾、バレーボールに注目した研究として、授業の充実に主眼を置いた佐藤²²⁾や観戦者の特徴を検討した廣他⁹⁾が確認できるものの、国内外を含め、その数は多いと言えない。さらに、スポーツ関与に関する研究の課題として、関与の量（回数）も然ることながら、質（事由）の解明に努め¹⁹⁾、特に心理学の観点からアプローチすることの重要性が指摘されている⁶⁾。

そこで、本研究では、バレーボールが持っている魅力に焦点を当てる。魅力は、人をスポーツに惹きつけ、スポーツに参画する機会を増大させる上で、非常に重要であると言及されている¹³⁾。また、小泉・伊藤¹¹⁾が示唆しているように、魅力はスポーツが持つ価値の中核である「楽しさ」や「喜び」を享受する源と考えられ、参画者を増大させることを越えて、そのスポーツを推進し、価値を高める要である¹⁴⁾。したがって、バレーボールの魅力を探査し、可視化することは、わが国のバレーボールが直面する諸課題を克服し、推進するための足がかりをつかむことになろう。具体的には、比較的経験年数が浅い初級者を対象として、バレーボールの魅力を探査し、可視化することで、これまでバレーボールにほとんど携わった経験のない者をバレーボールに惹きつけ、巻き込み、参画者の裾野を広げるための一助や体罰による指導を防ぎ、改善するための実践的指針を提供することができると考えられる。

以上のことから、本研究では心理学のアプローチ方法を用いて、バレーボールが持つ魅力を質的に検討し、可視化することを目的とする。これを通じて、わが国のバレーボールが普及・発展を遂げる上で、刮目すべき点を示すことを目指す。

Ⅱ. 方 法

2-1. 調査対象と調査時期

関東地方にある大学で開講されているバレーボールを教

材とした演習型（実技と講義が並行して行われる）スポーツ科目を受講する大学生77名（男性45名、女性32名：平均年齢20.68 ± 0.63歳、平均経験年数1.79 ± 3.18年）を対象として、質問紙調査を行った。調査時期は、2015年7月—2016年1月であった。

2-2. 調査手続き

調査の実施に当たって、著者が所属する大学に設置されている研究倫理審査委員会の承認を得た。調査は、対象者の身体的・精神的な負担を最小限に留め、プライバシーを守るため、当該科目で使用する十分なスペースが確保された講義室で行った。

実施に先立ち、対象者へ口頭と文書（フェイスシート）にて、本調査の主旨と参加に伴い予測される心身の負担を説明した。併せて、調査は対象者の参加同意（参加同意書への署名）を以て行われ、同意を表明した後であっても、自由に参加を撤回できる権利を持ち、辞退によっていかなる不利益を被ることがないこと、また、得られた個人のデータは研究者（著者）が速やかに匿名化し、個人や所属団体が特定できないようにするとともに、研究以外の目的で使用することは一切ないことを確認した。

2-3. 調査内容

2-3-1. 基本属性

性別、学年、年齢とバレーボールの経験年数（体育授業を除く）について、回答を求めた。

2-3-2. バレーボールの魅力

「バレーボールの魅力はどのような点にあると考え（感じ）ますか」という教示文により、バレーボールが持つ魅力について、自由記述で回答を求めた。

2-4. 分析

調査で得られたデータは、KJ法⁹⁾の第3ステップまでを用いて、分析を行った。分析は、バレーボールの魅力をつくる要因（特徴）を抽出し、整理することを目的として、スポーツ心理学を専門にする2名の大学教員と心理学を専攻する修士課程の大学院生1名の計3名で実施した。

はじめに、自由記述の回答を改変することなく1つずつカードにし、「紙きれづくり」（第1ステップ）を行った。回答が長文にわたる場合は、内容に鑑みて適切な長さに単位化し、それぞれを個別の回答として、カードにした。

次に、全てのカードの意味内容を作業員間で確認、議論し、研究の目的に鑑みて、コンセンサスが得られるまで吟味、検討した。その後、意味が類似していたカードを集めて、それらを下位カテゴリー（「」で表記）としてまとめ、親近性の高い下位カテゴリー同士をさらに上位カテゴリー（『』で表記）として集約し、「グループ編成」（第2ステップ）を行った。なお、内容が曖昧または意味を理解するこ

とができなかった回答は、分析の過程で除外し、集約が困難と思われたカードは、無理に他のカードと集約せず、そのまま独立して扱った。

最後に、相互関係があると見なされた上位カテゴリー同士、または上位カテゴリーと下位カテゴリーを近接させ(「空間配置」)、それらを枠取りして島(【】で表記)を作り、ラベルをつけた後、関連のある島同士を実線(矢なし: 関係あり、片矢印: 生起の順、両矢印: 相互に関係)で結び、「A 型図解」(第 3 ステップ)を行った。

Ⅲ. 結 果

調査から、全てで 268 の有効回答(カード)を得た。まず、グループ編成を行ったところ、Table 1 に示す結果が得ら

れた。バレーボールの魅力形づくる要因として、『他者との相互作用』『特異的なプレー構造』『種目としての特性』『感情の共有』『要求される物事』『技術』『スポーツとしての特性』『実感できること』『献身すること』『魅了される場面があること』『その他』という 11 の上位カテゴリーを得た。

続いて、グループ編成の結果に基づき、空間配置を行った結果、『スポーツとしての特性』『種目としての特性』と「オリンピックの競技種目であること」をまとめた【チームスポーツ】、『技術』と『要求される物事』をまとめた【すること】、『魅了される場面があること』と「観戦者も楽しめること」をまとめた【みること】、『他者との相互作用』と『献身すること』をまとめた【他者と関わること】、『感情の共有』と『実感できること』をまとめた【情意への産物』という

Table 1 バレーボールの魅力形づくる要因(グループ編成の結果)

上位カテゴリー	下位カテゴリー	回答の例
他者との相互作用 (106)	つなぐこと (23)	・ボールを「繋ぐ」こと ・チームで協力し、ボールをつなげるところ
	チームプレー (20)	・チームプレーなので、仲間と1つになってプレーできることが一番 ・チームプレーなので、全員が意識が通じるといいと勝てない点
	助け合うこと (15)	・助け合いのスポーツであるというところ ・お互いがお互いの足りない部分を補い、助け合いながら頑張るところ
	連携すること (12)	・連携すること ・1人の力ではどうにもできないため、チームで声をかけ合って連携をとって点をとるところ
	チームワーク (10)	・お互い助け合う精神を持つことでチームワークが生まれ、そのチームワークこそ ・他の競技と比べて、チームワークが重要である点
	関係を構築できること (9)	・自分が持ったボールを誰か上げてくれるという経験を通して信頼関係が築かれていく ・6人で協力し合い、プレーをすることで、見ず知らずの相手とも絆が生まれるところがいっぱい
	コミュニケーションすること (7)	・必然的に連携をとることになるので、自然とコミュニケーションが取れること ・盛り上げのコミュニケーションが上手いところ
	団結すること (5)	・プレーが一番、チームが団結しなければならぬスポーツ ・団結力を体感できることができた
	協力すること (5)	・チームで協力しなくては何点も取れないところ ・チームのみんなが力を合わせて、得点を取りに行ける
	コートでの緊張感 (8)	・コートでの緊張感を持って、たった一瞬間に決めるだけなのに様々な攻撃と防衛があること ・攻撃の種類が沢山あること
特異的なプレー構造 (31)	ボールへの接触 (7)	・3回しかタッチできないインプレー
	空間 (5)	・1つのボールを離れた距離の中で返すというのは振るを使う ・何がコート内にも入れない空間でよく動く
	役割 (4)	・球技では比較的好いように思うコートで、とても速いボールの打ち合いが、他の球技にはない ・明確な役割(セッターやリベロ等)が決まっている
	役割があること (3)	・「役割」のあるスポーツであること ・種別があるプレーや相手の動きを大きくプレーなどから、試合の流れがガラリと変化するところがある点
	ゲームの展開 (3)	・スピーディーに試合展開が移り変わる点 ・最後の最後まで結果が分からないのもおもしろい
	駆け引きがあること (1)	・ネット際の駆け引きも面白い
	競いあふこと (11)	・ボールをつなげたりあえずは試合ができること ・勝てると
	進行 (5)	・「ボールを落としたり責め」という点 ・レシーブをセッターに戻して、セッターがアタッカーにトスを上げて、アタッカーがスパイクをうつ
	1人で決まらないうこと (4)	・練習も試合も、決して1人で打つことはできない ・どんな上手な選手でも決して1人で決まらないうのがバレーボール
	得点 (3)	・点が多く入ること ・セッターやリベロと比べて、得点も多く入り、多くの人が得点を奪えること
感情の共有 (22)	分かち合えること (12)	・チームでボールをつなぐ、3段攻撃が決まった時など、チーム全体で喜びを分かち合える事 ・自分がかっこよく振舞っていたとしても、ボールを触っていただけだったとしても、チームの皆で喜ぶことができる
	一体感: 1つになっている感覚 (6)	・相手との一体感を感じることができた ・広いコートの中でボールを落とさないように仲間が声をかけ合い、動く一体感
	連帯感: つながっている感覚 (4)	・1人のためにみんなが動いたりみんなのために人が動くといったチームの連帯感が必要である ・6人でボールをつなぐことにより、6人の心もつながる
	要求される物事 (18)	特性を活かすこと (8)
個人の能力 (3)	・「誰の力か」が大事ということ ・1人1人の技術の差というのが顕著にプレーに現れる	
集中力 (2)	・集中力をききさないとかなり大切 ・意識が集中しているときに相手は取れない面白さは他のスポーツよりも勝っている	
判断力 (2)	・チームの流れがタイムアウトやリベロで止まらずに、瞬間の判断が求められる点 ・判断力が大事なスポーツ	
予測力 (1)	・頭をフル回転させて、相手よりも一歩、二歩先まで(戦況を)読まなければいけない	
種別性 (1)	・種別性が必要	
チームプレーと個人の身体能力 (1)	・チームプレー、個人の身体能力が両方の左右を5:5に分ける	
技術 (17)	上達すること (6)	・1回1回、回数を重ねることに上達を感じることができると ・上達するのがあること
	アタック (5)	・アタックが決まって点数が取れた時気持ちいい ・スパイクを打った時に当たった感じがたまらぬ
	レシーブ (2)	・絶対に上がらないうと思ったボールが上がる時 ・相手が打ってきた(スパイク)を機嫌よく返すときが爽快
	ラリー (2)	・お互いが拵って拵ってラリーが続く ・ラリーが長く続けられれば試合が盛り上がり、やっている選手もどんどん楽しめる
	ブロック (1)	・レシーブやブロックを決めた瞬間は他のどのスポーツよりも味わえない最高のもの
	全般 (1)	・何よりやっていると楽しさ
スポーツとしての特性 (14)	チームスポーツ (11)	・バレーボールは6人でやるチームスポーツなので、やはりみんな協力して勝利をつかむこと ・1人だけが上手くても、試合には勝てないチームスポーツだということ
	団体スポーツ (2)	・団体スポーツであるということ ・喜ぶために喜びをわかちあえるチームメイトがいることは本当に団体スポーツだからこそ
	集団スポーツ (1)	・集団スポーツなので「みんなでがんばること」
	仲間の重要性 (5)	・仲間の大切さを感じた ・試合をしている時に助け合ったり、ミスしても「大丈夫!」って言ってくれたり
実感できること (14)	成長 (2)	・仲間を助まし合い、成長すること ・今まで自分が出なかったことが先生や周りの友達とアドバイスをもらって力を付けたり、練習をたくさんすることで出来るようになった時、自分の成長も感じられるということ
	精神の強化 (2)	・諦めない精神力が身に付く ・自分のためどころか周りばかり向き合っていくのでメンタル面がきたえられる
	プレーと心のつながり (2)	・自分の心とプレーが繋がっているということ、とてもおもしろい ・チームプレーと個人の身体能力が両方の左右を5:5に分ける
	高揚感 (1)	・言葉にならない高揚感が得られる ・あんなにやっていると結果がついてくる事がある点
献身すること (12)	決断力の向上 (1)	・決断力の向上につながる
	尽力すること (5)	・仲間のために自分を犠牲にしてボールをくわくつける ・責任をもち、チームのために上達することを目指していくので、チームのためににかしようという積極性もでてくるはずらしいスポーツ
	貢献できること (4)	・自分のチームメイトが決めるようにレシーブやトスをあげて、貢献できるのがすごく楽しい ・自分のついたボールが上がる時
	思いやること (3)	・他のどのスポーツよりも相手思いやり、相手に責めないからするスポーツ ・とても信頼、気づかいが必要なスポーツである
魅了される場面があること (9)	選手の躍動感 (3)	・選手が躍動感 ・ボールが床に叩きつけてくる選手たちの声援が立った ・落ちるか落ちないかの瀬戸まわりのプレー ・勝っても負けても、このボールはとれないって思ったものを拵って返すと「おっっっ」って感動するし楽しい
	迫力 (2)	・男子では迫力あるサーブやアタックに圧倒される
	リベロ (2)	・リベロが簡単なスパイクや攻撃参加できないながらもチームのために身体的にボールをつなごうとする点 ・ひらけないと思った時、ボールをひらいた時の数秒とリベロのドヤ顔の楽しさ
	その他 (2)	観戦者も楽しめること (4) オリンピックの競技種目であること (1)・オリンピックが盛り上がる

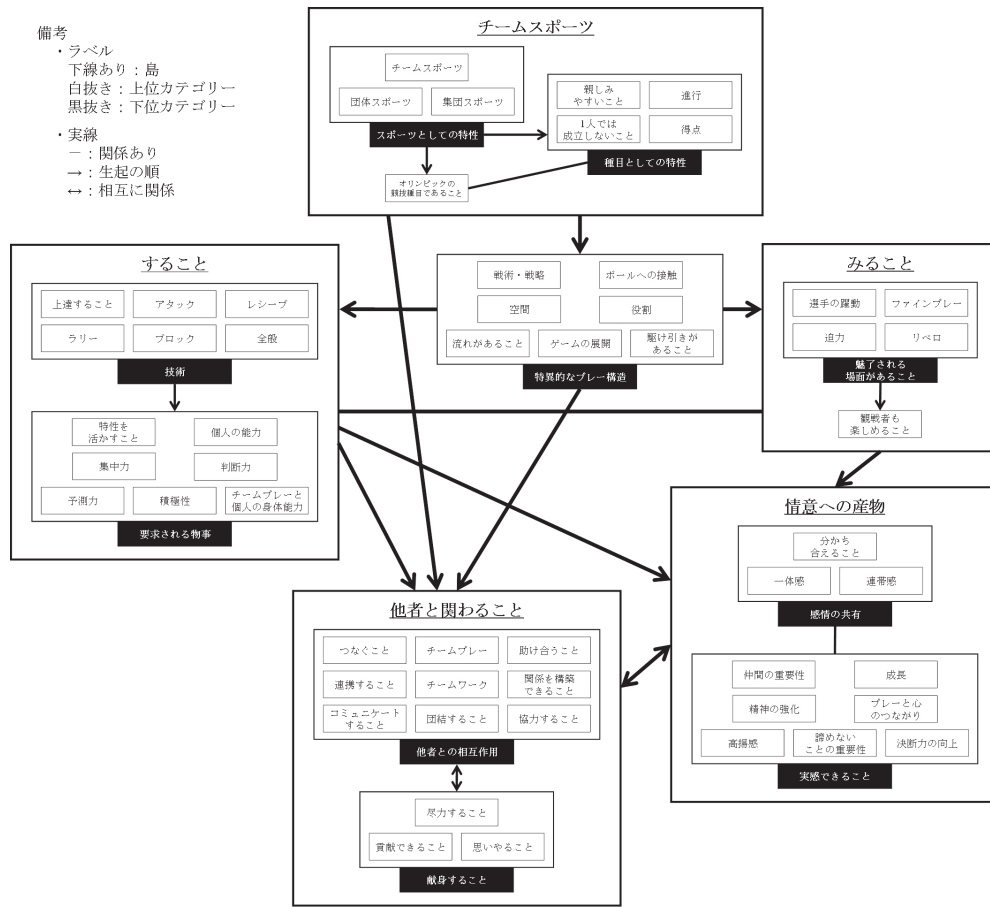


Figure 1 バレーボールの魅力 (A型図解の結果)

5つの島が得られた。そこに独立した『特異的なプレー構造』を加え、A型図解を行ったところ、バレーボールが持っている魅力について、Figure 1に示す結果を得た。

IV. 考察

本研究では、バレーボールが持っている魅力を質的に精査し、可視化することに努めた。その結果、バレーボールの魅力は、大きく6つにまとめられることが明らかになった。以下では、分析から導き出されたバレーボールの魅力の形づくる、それら6つの特徴について考察する。

4-1. チームスポーツ

ここでは、「チームスポーツ」「団体スポーツ」「集団スポーツ」の3つの下位カテゴリーをまとめた『スポーツとしての特性』、「親しみやすいこと」「進行」「1人では成立しないこと」「得点」の4つの下位カテゴリーをまとめた『種目としての特性』と独立した「オリンピックの競技種目であること」を集約し、島を形成した。

バレーボールは、少なくとも1チームに6名のメンバーが必要であり、1人が連続してボールにコンタクトすることができないため、メンバーと協力し、支え合いながら進

めていくことが求められる、チームスポーツの代表的な種目と捉えられていることがうかがえた。同時に、バレーボールは「相当の練習と経験が必要になる」²⁵⁾ 一方、「1人では成立しないこと」や「得点」を積み重ねていかなければならないことなどから、後に触れる『他者との相互作用』が必然的に行われ、例え個人のレベルが低くとも、比較的容易にゲームを成立させることができるという点で、親しみやすいスポーツ²⁷⁾とも理解されているのかもしれない。また、A型図解では、直接的に関係していないものの、全ての島がこの【チームスポーツ】を背景にしていると推察されるため、「オリンピックの競技種目であること」をポイントに、チームスポーツとしての特性を考慮しながら、バレーボール固有の魅力をいかに構築し、周知していきけるかが、今後のバレーボールの普及・発展に向けた中核的課題となろう。

4-2. 特異的なプレー構造

ここでは、「戦術・戦略」「ボールへの接触」「空間」「役割」「流れがあること」「ゲームの展開」「駆け引きがあること」の7つの下位カテゴリーをまとめ、上位カテゴリーを形成した。

『特異的なプレー構造』は、素手で打つ・弾くなどのボールをコントロールする動作を基本技術に、味方同士でパスをつなぎ、複数の戦術を駆使して、「ネットで隔てられたコートで2つのチームが対峙し、地面にボールを落とさないように打ち返し合って得点を競うスポーツである」²⁰というバレーボールの、他のスポーツと一線を画す特徴を表していると思われる。佐藤²¹は、運動上の特性を考慮し、バレーボールの特徴の1つに「ネットを隔てた比較的狭い場所でも多人数で楽しむ」ことができると挙げており、本研究の対象者は受講生であったものの、バレーボールに関わろうとした者が少なからず、【チームスポーツ】に付随して、そのようなバレーボールのゲームやルールに関する特異性に魅力を感じていた。このことに加えて、A型図解では独立しながらも、複数の島と関係が見られるように、『特異的なプレー構造』が【すること】【みること】【他者と関わること】といったバレーボールのより深い魅力につながっていると考えられる。

4-3. すること

ここでは、「上達すること」「アタック」「レシーブ」「ラリー」「ブロック」「全般」の6つの下位カテゴリーをまとめた『技術』と「特性を活かすこと」「個人の能力」「集中力」「判断力」「予測力」「積極性」「チームプレーと個人の身体能力」の7つの下位カテゴリーをまとめた『要求される物事』を集約し、島を形成した。

『技術』は、バレーボールのみならず、それ自体を駆使したり、改善したりするほか、そのスポーツの楽しさや奥深さを実感することができる、あらゆるスポーツに共通する普遍的な魅力と言えよう。バレーボールでは、『特異的なプレー構造』に付随する『技術』として、主にオープンスキルが求められ、適切なオープンスキルを発揮する上で、状況判断能力が重要となる¹⁹。そこで、バレーボールを一層楽しみ、高いレベルを経験するためには、『技術』に加えて、『要求される物事』に表される思考・判断や体力など、多様な能力が要求される²⁷が、同時にメンバー個々の能力を活かした多様なチーム編成や戦術の選択ができるという点で、バレーボールは多様性に富んだ【すること】をチームで選択、追求し、競い合うことを特徴とするスポーツであると考えられる。

4-4. みること

ここでは、「選手の躍動」「ファインプレー」「迫力」「リベロ」の4つの下位カテゴリーをまとめた『魅了される場面があること』と独立した「観戦者も楽しめること」を集約し、島を形成した。

昨今、スポーツへの多様な関わりが謳われ、国内の参画人口拡大に向け、【すること】と同等に、スポーツを【み

ること】が推奨されている¹⁴。本研究では、それを反映することとして、バレーボールの魅力が【すること】に留まらず、『魅了される場面があること』や「観戦者も楽しめること」といった【みること】にも内在しているとうかがえる結果が得られた。また、A型図解において、【みること】は【すること】と関係があるように、【すること】が苦手な者であっても、スポーツに関わる機会を享受し、【すること】やささえることへの移行が期待できる¹⁴ほか、【情意への産物】とも関係しており、効用や価値をはじめとした、そのスポーツに対する理解を深めることにもつながっていると考えられる。したがって、バレーボールの参画者を増大させるためには、現在進められているVリーグの構造改革¹⁷を皮切りに、Vリーグの観戦に訪れた者の半数以上がプレー経験はないものの、ルールや知識を十分に理解している⁹といった、観戦者の特徴を意識した国内トップリーグの競技力向上やファンを惹きつけるサービスの提供など、多方面からバレーボールを【みること】の魅力を高めていく取り組みが必要と言えよう。

4-5. 他者と関わること

ここでは、「つなぐこと」「チームプレー」「助け合うこと」「連携すること」「チームワーク」「関係を構築できること」「コミュニケーションすること」「団結すること」「協力すること」の9つの下位カテゴリーをまとめた『他者との相互作用』と「尽力すること」「貢献できること」「思いやること」の3つの下位カテゴリーをまとめた『献身すること』を集約し、島を形成した。

回答数が最も多かった「つなぐこと」に代表される、ボールを介した『他者との相互作用』は先行研究²²でも示されているように、試合に勝つだけでなく、バレーボールそのものを成立させ、楽しむ上でも、不可欠な要因に位置づけられていると推察される。『他者との相互作用』と相互に関係する『献身すること』は、チームスポーツの中で、とりわけ相互作用が必要かつ重要となるバレーボールにおいて、メンバー間の相互作用を根底から支え、さらなる相互作用を生み出す源泉であり、また『他者との相互作用』を通じ、醸成される心持ちとも捉えられる。A型図解において、これらをまとめた【他者と関わること】は、多くの島が帰結しているほか、運動やスポーツへの関与に当たり、他者の存在が重要な役割を果たしている²³ことから、他者の存在と他者との関わりが必須となるバレーボールを特徴づけ、その魅力を形づくる最も重要な要因であると考えられる。すなわち、【他者と関わること】こそがバレーボールの醍醐味であり、バレーボールを普及・発展させるための鍵と言えよう。

4-6. 情意への産物

ここでは、「分かち合えること」「一体感：1つになっている感覚」「連帯感：つながっている感覚」の3つの下位カテゴリーをまとめた『感情の共有』と「仲間の重要性」「成長」「精神の強化」「プレーと心のつながり」「高揚感」「諦めないことの重要性」「決断力の向上」の7つの下位カテゴリーをまとめた『実感できること』を集約し、鳥を形成した。

『感情の共有』と『実感できること』は、ともに【すること】【みること】といったバレーボールの実践を通して、感じたり、知ったりできることと捉えられる。『感情の共有』は、1つのボールをつなぎ、得点を取るために必要な他者との協働やチームのまとまりに対して、そこに携わる者同士が感情を共有していること、また『実感できること』は、バレーボールに関わる中で、「精神の強化」に代表される能力や「仲間の重要性」に代表される環境など、バレーボールの多様な効用や価値に触れ、多くの気づきが得られることを表していると推察される。これらをまとめた【情意への産物】は、A型図解において、バレーボールの醍醐味と言える【他者と関わること】と相互に関係していることから、他者と作業や役割を共有するだけでなく、心を交わすことができるなど、バレーボールには未だ十分に認識されていない魅力があることを示唆しており、われわれにはそれらを掘り起こす一方、バレーボールの本質を改めて精査し、理解することが求められているのかもしれない。

V. ま と め

本研究では、わが国のバレーボールが直面する諸課題を克服し、推進する足がかりをつかむため、バレーボールの魅力を質的に検討して、可視化することを目的とした。その結果、バレーボールの魅力は、主に6つの特徴から形づくられ、それらは相互に関係していることが明らかになった。具体的に、バレーボールの魅力は、チームスポーツであることを起点として、特異的なプレー構造がバレーボールへの関与（する・みる）を助長し、関与する中で他者と関わったり、感情を共有したり、多様な知識や経験を得ることができるという特徴から形づくられていた。

以上の知見は、単にバレーボールの魅力を精査し、可視化したことに留まらず、今後バレーボールに初めて、あるいは継続的に関わる者を増大させ、バレーボールのさらなる魅力を発掘する上で、重要な示唆となろう。特に、日本バレーボールリーグ機構¹⁷⁾がビジネス化に主眼を置き、参画者の増大に向けて進めているVリーグ構造改革の取り組みと照らし合わせると、本研究の結果は参加チームやファンをはじめ、バレーボールに関わる多様な人を大切に、人々のニーズに応える付加価値、魅了されるサービスを提供するなどの点で、その取り組みを支持するもので

あった。それ以外にも、【すること】や【他者と関わること】といった点で、今後参画者の裾野拡大に向け、子どもやファン、経験したことのない者がバレーボールを体験したり、それらの人同士がつながったりできる機会を設けることの重要性が確認された。このような成果が得られたことに、本研究の意義があろう。

しかしながら、さらに有用な知見の獲得や後続する研究の深化に向けて、改善の余地が残されていることも記述しておきたい。本研究では、経験年数が平均的に浅い者を主要な対象としたが、バレーボールは経験が重要となる²⁵⁾スポーツであるため、経験年数の浅深によって、感じる魅力の観点は異なると予測される。したがって、本研究では、バレーボールに関わるきっかけとなる要点を見出すことはできたものの、既に関わりを持っている者がより深く、継続的にバレーボールに関わることを誘引するような、バレーボール固有の新規的魅力を明示するまでには至らなかった。また、次なる発展を見据えて、経験を重ねた者をはじめ、多様な属性の対象者を選定したり、因子分析などを用いた量的検討を試みたりするほか、結果に示されたバレーボールの魅力をいかに伝え、実感させるかという実践的研究も必要となろう。それらに取り組むことで、引き続きバレーボールの普及・発展に寄与する有用な知見の獲得に努めていきたい。

謝 辞

本研究は、2018年度法政大学スポーツ研究センター・研究プロジェクト「バレーボールのインストラクションにおけるポイントの整理」より助成を受けました。ご協力賜りました関係各位に御礼申し上げます。

V. 参考文献

- 1) 阿江美恵子, 運動指導者の暴力的行動の影響: 社会的影響過程の視点から, 体育学研究, 45, pp. 89-103, 2000.
- 2) 青柳健隆, 他, 学齢期の組織的スポーツ参加と成人期のスポーツ参加の関連: 回顧的データに基づく持ち越し効果の検討, スポーツ産業学研究, 27 (3), pp. 245-256, 2017.
- 3) 朝日新聞, 12月1日付朝刊, 朝日新聞社, 2017, p. 38.
- 4) Federation Internationale de Volleyball, FIVB VOLLEYBALL WORLD RANKINGS, <http://www.fivb.org/en/volleyball/Rankings.asp>, (参照日 2018年3月30日参照), 2017.
- 5) 廣美里, 他, バレーボールのV・プレミア・チャレンジリーグにおける観戦者の特徴, バレーボール研究, 19 (1), pp. 20-27, 2017.

- 6) 笠野英弘, スポーツ実施者からみた新たなスポーツ組織論とその分析視座, 体育学研究, 57, pp. 83-101, 2012.
- 7) 笠野英弘, スポーツ観戦マイスター制度, スポーツ産業学研究, 27 (4), pp. 355-358, 2017.
- 8) 河合学, バレーボールの誕生と発展の歴史, コーチングバレーボール (基礎編), 第 1 版, 大修館書店, 2017, pp. 2-9.
- 9) 川喜田二郎, 続・発想法, 第 5 版, 中央公論社, 1970.
- 10) 菊池広人, 他, 潜在的スポーツ人口のスポーツニーズ, スポーツ産業学研究, 12 (1), pp. 31-38, 2002.
- 11) 小泉昌幸・伊藤巨志, 大学生のスポーツ行動の価値意識に関する一考察, 新潟工科大学研究紀要, 9, pp. 107-122, 2004.
- 12) 工藤孝幾, スポーツに関連する認知・知識の発達, スポーツ心理学事典, 第 1 版, 大修館書店, 2008, pp. 109-112.
- 13) 間野義之・舟橋弘晃, オリリンピック・パラリンピックレガシーとは, 体育の科学, 66 (3), pp. 166-171, 2016.
- 14) 文部科学省, スポーツ基本計画, http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf, (参照日 2018 年 3 月 30 日参照), 2017.
- 15) 文部科学省, スポーツ立国戦略, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/09/16/1297203_02.pdf, (参照日 2018 年 3 月 30 日参照), 2010.
- 16) 日本経済新聞, 1 月 11 日付朝刊, 日本経済新聞社, 2013, p. 35.
- 17) 日本バレーボールリーグ機構, V の構造改革～バレーボールのスポーツビジネス化に向けて～, <https://corp.vleague.or.jp/special/>, (参照日 2018 年 3 月 30 日参照), 2017.
- 18) 西坂珠美・會田宏, 高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為, 武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学), 55, pp. 149-157, 2007.
- 19) 野邊政雄・梶房出, スポーツへの関わりに関する研究動向, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 153, pp. 109-113, 2013.
- 20) 布村忠弘・緒方良, 基本技術の考え方, コーチングバレーボール (基礎編), 第 1 版, 大修館書店, 2017, pp. 122-123.
- 21) 大勝志津穂, 現在の実施種目からみる過去のスポーツ経験と今後の希望, スポーツライフデータ 2016—スポーツライフに関する調査報告書—, 第 1 版, 笹川スポーツ財団, 2016, pp. 30-34.
- 22) 佐藤国正, バレーボールの授業の充実に向けた研究—大学生に着目して—, 桐蔭論叢, 37, pp. 61-68, 2017.
- 23) スポーツ庁, スポーツの実施状況等に関する世論調査, http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/03/27/1402346_7.pdf, (参照日 2018 年 3 月 30 日参照), 2017.
- 24) SSF スポーツライフ調査委員会, 運動・スポーツ実施状況, スポーツライフデータ 2016—スポーツライフに関する調査報告書—, 第 1 版, 笹川スポーツ財団, 2016, pp. 72-81.
- 25) 豊田博, 初心者はどうバレーボールを導入するか, FIVB COACHES MANUAL 2011, 第 1 版, バレーボール・アンリミテッド, 2011, pp. 29-68.
- 26) 矢島忠明, バレーボールのコーチング, 教養としてのスポーツ科学—アクティヴ・ライフの創出をめざして—, 第 1 版, 大修館書店, 2011, p. 97.
- 27) 吉田清司, バレーボール, 21 世紀スポーツ大事典, 第 1 版, 大修館書店, 2015, pp. 1209-1215.